

増谷文雄著

仏教とキリスト教の比較研究

岡 邦 俊

著者は宗教学を専攻し、今日まで多くの著書をもつし、その労作は学界でも高く評価されている。ここに紹介する本書も学界における名著の一つである。本書はすでにその英訳版も刊行され、欧米にあっても貴重な資料として広く利用されている。

思ふに、一つの宗教を完全に理解することさへも容易ならぬことであるが、二つの宗教を比較研究する―その類似を結合し反対を分つ―と云ふことは極はめて困難な仕事である。

著者はこの困難な仕事を本書において立派になしとげているように思ふ。

仏教とキリスト教は謂はば世界の代表的二大宗教であり、民族と国境を越へて人類文化の二大源泉ともなつて、永く幾億の人心の糧となり光明となつてきた宗教である。この二つの宗教を比較研究することは、学問的にも実際的にも極はめて意義の深いものである。

本書はまことに用意周到にして而も公平なる学問的立場からキリスト教と仏教の類似と相異を明確にしているが、仏教徒にとつてもキリスト教徒にとつても相互理解のために重要な役割りを果すものであらう。もとより仏教とキリスト教とは、宗教としての共通の基盤に立ちながらも、その教義信条と実践においては決して同一のものではない。このような共通の類似と根本の相異を明確にしてくれたいものが実に本書なのである。

本書の内容は四編よりなつてゐるが、何れもその表現は現代的であり、而も、キリスト教と仏教との何れにも共通する課題をとりあげて論じてゐる。第一編は

「人間論」となつてゐるが、それには、この二つの宗教は「私はいかなる人間であるか」との問いに対して、いかに教えるであらうか、との副題がつけられてゐる。「理性の言葉をもつて聴く者の理性に語りかける」「理性的人間の立場」と云ふ「理性の道」が仏教の人間論の中心をなしてゐる。それに反して、「權威あるものの如く命ずる」「感情に対して訴へる」「權威あるもの前にれひ伏す」態度がキリスト教の人間論の中心をなすとされてゐる。尚、本編は一章「人間の主体的省察」、二章三章「二つの人間解釈」(1)(2)となつてゐる。

第二編は「幸福論」で、これには、この二つの宗教は「私は何を願うことができるか」との問いについて、いかに教えるであらうか、との副題がつけられてゐる。二つの宗教は共に「世俗のよろこびを捨て、世俗のむなしさに打ち勝つ」て真実の幸福を追求するものである。併し、その追求の仕方は両者は決して同一ではない。現性の道によつて、普遍的真理を体験し、自己啓培による人生苦からの自由と解放、自律的自我の完成は仏教の教えである。自らを灯明とし、法、真理を灯明とし依り処として理想の「解脱」「涅槃」を実現しようとするのが仏教である。キリスト教は、神の愛によつて「地上における罪と死とから救はれ、天国に於ける永遠の生命」のかく得、「造られし者の虚無」「神は全、我は無」の立場で真実の幸福を求めようとするものである。本編は四章「幸福への道」、五章「解脱と救済」、六章「解脱への道」、七章「救済への道」となつてゐる。

第三編は「信仰論」であるが、これには、この二つの宗教は「私は何に依ることができるか」との問いについて、いかに教えるかとの問いについて、いかに教えるであらうか、と副題されている。著者はここで先ず、信仰の二つの型として「解信」と「仰信」について述べてゐる。「教えをききそれを理解して決定回心して、もはやこの教えをおきて他に依ることなしとする」を解信となし、「一箇の人格を仰いでもつぱらそれに依り頼む、絶対憑依の態度」を仰信となし仏教は前者の道であり、キリスト教は後者の道であると論じてゐる。この意味において仏教はあくまでも「知慧」の宗教であり、キリスト教は「信仰」の宗教であるとも論じてゐる。著者はここで又、キリスト教と一見して極めて類似する信仰を持つ、浄土門の仏教とを比較してゐるが、極はめて興味ある論述である。神、祈り、救いの信仰を本来持たなかつた仏教の中に、「アマダ仏の慈悲を信仰す

ることによって救はれる」との、浄土門の仏教はいかにして発生したであろうか。自己啓培による解脱の道を説く仏教と、神の創造と支配の信仰による救済の道を説く、キリスト教との特異性は対照的である。この特異性の中で、浄土仏教とキリスト教との類似性についても著者は適切な説明をなしている。本編は八章九章「仏教における信(1)(2)」、十章十一章「キリスト教における信仰(1)(2)」、十二章から十四章に亘って「キリスト教における信仰と浄土門における信仰について」(1)(2)(3)となっている。

第四編は「実践論」であり、ここにも、この二つの宗教は「私は何を為すべきであるか」との問いにつき、いかに教えるであろうか、と副題がつけられている。この問いへの説明として、十五章十六章「宗教的实践と世間的道德(1)(2)」、十七章「慈悲と愛について」、十八章「汝をして人と異ならしむるものは何ぞ」が、それぞれ論ぜられている。ここでも著者は、キリスト教と仏教との類似と相異とを明確に論じている。特に筆者は、「慈悲と愛について」は教えられるところが多かった。

(東京青山書院発行、菊版三〇八頁、定価三五〇円)

Theories of Education

An Introduction to the Foundations of Education
Harper & Row, publishers, N. Y., 1963 521 pp \$ 6.50
by John P. Wynne, Ph. D., (co Iumbia uni).

教育学における諸学

— 教育学の基礎入門書 —

荒井貞雄

著者、ワイネ博士は、かつては公立学校の教師、校長であったが、のちに

Virginia の小さな Longwood 大学の哲学、教育学科の長を三〇年以上つとめた人で、現在は名誉教授である。この間、全米または東部地域の哲学、教育学会で広く活躍した学究の徒でもあり、また実践家でもあった。一九四七年に Prentice-Hall から刊行された「教育哲学」を含めて九冊の教育書がある。いづれも斯界では非常に高く評価されている労作である。

この本は E. E. Bayles が編者となつて出している Harper's Series on Teaching の一冊である。著者はその序文で、各章ごとに妥当な学者の検閲を乞い、その助言を快くうけ、慎重にその正確さと実践性とを期したと述べ、多くの学者をあげて、謝意を表している。その内容を吟味してみると著者の言葉の真実性がよく理解できる。

著者は二つのはっきりした目的を堅持して全体をすすめている。その一つは先哲によって展開された多くの教育学説が、現代誤って解釈されているので、その問題を明確にすること。他の一つは、最近、教育学の基礎、例えば、教育史、心理学、哲学、社会学的基礎等、に対する自然科学者群の圧迫、論議、挑戦に関連しての応答、対処である。

第一の目的を果すために、著者は極めて忠実に、各々の学説提唱者の素材について克明に再吟味を試みる、と同時に、最近のその学説についての研究結果の分析を科学的に進めている。第二の目的のためには、多くの学説を、なかば、歴史的順に整え、哲学的心理学的基礎、実践的関連性、および、文化教養的背景の立場からの分析を試みている。

各章四節からなり、その一、二節では、主として学説そのものを扱い、その三節では歴史上からみた文化的評価、その四節においては結論的注解を、注意深く試みている。章の終りにその学説提案者およびその支持者の原著書、文献等を列記し、そのうちのあるものは常々効果的に引用され、読者に親切に整理されている。また、書物の末尾に二段抜き五頁に亘り索引が用意されている。

著者がとりあげている学説は十二で次の如きものである。

- 一、形式訓練説 (The Formal-Discipline Theory)
- 二、自然完成説 (The Natural-perfection Theory)
- 三、知覚説 (The Apperception Theory)

- 四、習慣形成説 (The Habit-Tendency Theory)
- 五、人間の欲求説 (The Human-wants Theory)
- 六、一般的成長説 (The Universal-Growth Theory)
- 七、新実験主義説 (The Later Experimentalist Theory)
- 八、精神的自己実現説 (The Spiritual-Self-Realization Theory)
- 九、超自然的発達説 (The Supernatural-Development Theory)
- 十、大古典主義説 (The Great-Classic Theory)
- 十一、社会的自己実現説 (The Social-Self-Realization Theory)
- 十二、基礎教科説 (The Basic-Subjects Theory)

アメリカの教育は二十世紀の初めに Dewey が、あらわれて以来、いわゆる進歩主義理論派に依つて風びされた観があつた。ここでは、学習者の経験と社会性が大きくとりあげられた。それに対し、W. C. Bagley や Kandel 等、教科を強調する伝統または本質派が対立し、賑やかであつた。Dewey 亡き今日といえども、この論争は解決したわけではない。むしろ、両派はあるいは我城に閉ぢこもり、あるいは相互に交錯した状態において、Wynne が指摘しているように新実験、精神的宗教的自己実現、大古典、または社会的自己実現等の諸説へと進展し、その止む処を知らないあさまさを示している。

ところが、第二次世界大戦終了まもなく自然科学者、技術者の大量養成の必要に迫られ、物理学研究委員会 (PSSC) によつて、教育課程 (高等学校) の再編成を余儀なくされている。ここでは Dewey の業績を肯定しながらも、即ち、学校は現実の問題と取り組む生活の場だけで、足れりとせず、むしろ人類がかつて夢想だにしなかつた未知の世界へ突進するために、最大限の知性を駆使して、何かを発見しようとする特殊な場なのだという。ここでは、人間性よりは学問性、社会性よりは本質的教科性が重要視される。更にこの物理学研究委員会の高等学校課程再編成の仕事は自然科学者及心理学者の手で進められ、教育専門学者、実践家は、しめ出されている。

教育学者であり、実践家である著者は「この本は、今日の教育学に影響している重要なあらゆる論説を歴史的・哲学的・心理学および社会的基盤に立って、充分な、そして総合的な分析を試みたものである。」と同時に、その結果を今日の教

育課程、方法、教育行政に應用している」と述べていることによつても、彼の動機は明瞭である。

更に、彼は「教育学の基礎入門書」と副題をつけ、教職課程の重要書即ち入門書であると同時に、深い専門書であることを強く述べている。文盲の社会においても教育という作用はある。なんらかの考えに基いて、その作用は進められていくことも、否めない。その考えが教育原理である。そして、その原理は、その人により、その場所により、その時により進め方が異なり、また変化していくとともに習慣化即ち伝統となつて伝達される。これが学説である。いかなる時代いかなる場所においても、もちいられるその学説は決して単純なものでなく、常に過去の上になつて成立しているのである。いかなる教育学説でも、短い期間に急カーブ的に出来るものでないとともに、現在をつくつた否、影響をもたらした過去を無視することは冒険であり、危険である。世界を通じ、今日程、教育ということが重要視される時代は余りない。Wynne 博士のこの新著は、過去の主要教育学説の正確なたなわりの調べであり、現在との関係を正確に把握し、今後、どうすればよいかという難問題に答える役割をしている力作である。教育を志すもの、教育という仕事にたずさわるものの見のがすことの出来ない明晰な書である。

(一九六四、二、一一)

仏教文学研究会編

仏教文学研究 (一) (二)

田中重太郎

ここにとりあげる「仏教文学研究」(一)(二)は、どちらもB6判ながら、(一)は、三一〇頁、(二)は、三七〇頁、計六八〇頁もあり、執筆者は二十名におよぶ論文集であるから、その論文名を羅列するだけで与へられた紙数に達しきうであるが、その人名と論文名との紹介にとどまっても、十分意義があると考へるので、国文科に入学して来た人人を対象としておほげなき短評を加へてしるしてみる。

まづ、第一集の目次をみると、

序	山岸 徳平	一
拈華微笑と笑拈梅花	山岸 徳平	九
遊部考	五来 重	三三
天台教学から見た源氏物語	大久保良順	五一
釈教歌考	岡崎 知子	七九

——八代集を中心に——

平家物語に於ける仏教説話について	高橋 貞一	一一九
宴曲と寺社	外村 久江	一五三

——宴曲はどうして鎌倉幕府下に成立したか——

文学・仏教・中世をめぐる問題	榎 克朗	一九一
----------------	------	-----

法語 文芸	菊地 良一	二二七
-------	-------	-----

絵解と本願寺聖人親鸞伝絵	福永 静哉	二五七
--------------	-------	-----

親鸞に関する中世の一談義本	宮崎 円遵	二七五
---------------	-------	-----

筆者紹介	三〇八	
------	-----	--

のやうである。下に掲げてある数字は、その論文の所在ページであるから、後の数字から前の数字をさし引くと、その論文のページ数が計算できる。たとへば、「釈教歌考」は、一一九から七九を引いた四〇ページで、十篇のうちもつとも長いものであり、序は、九から一を引いて八ページでいちばん短い量である。(なほ、一ページは、四二字一六行で六七二字である。)

さて、右にあげた十人の学者のうち、あなたが——これは、主として国文科の学生に対していふ——知ってゐる人は何人あるか。姓名だけを存じあげてゐるのが幾人で、姓名とお顔とを存じあげてゐる人が幾人、名も人もよくよく知ってゐる、交際してゐる人が幾人かとたづねられたら、どう答へるか。「一人も知らない」「全然知りません」といふ人もあるかも知れない。正直にいつて、わたくしは、ここに示された十人のうち、面識があり、あるいは、話しをしたことがありあるいは、教へを受けたり、したしくさせていただいてゐる学者が五人で、あとは芳名を知つてゐる人、全然知らない人である。そんなことは、どうでもよいではないかと思はれようが、決してさうではない。現にあなたが自分で書いた文を

活字にしたとき無関心でゐられますか。自分にもつとも近い人が書いた文を読むとき、自分が尊敬してゐる人、自分が愛してゐる人、いや自分がちよつとも知つてゐる人の書いたものであつても、まったく知らない人のものとは、それを読むときには、別の関心をもつてあらう。それが文芸作品であるならば、好きな作家のものときうでないものとの熱意の相違にもなるのである。

書評がとんだ脱線をしたが、もうすこし脱線をつづける。本学の国文科に学ばれる一年生にきく。ここにあげられた論文名を読んでそれがどんなことを論じたものであるが、ほぼ推察ができますか。「拈華微笑」「遊部」が読めますか。「釈教歌」「宴曲」「談義」とは、それぞれ大体どんな意味のことかわかつてゐますか。右のうち「遊部」の読みかたはやや特別のものといへようが、文学・学問・宗教などの世界における専門語は、心得ておかねばなるまい。といつても、これらの大平を知らぬ人が、この論文集を座右にされることをおそれてはならないことを強く説きたい。むしろ、この論文集の一篇二篇をよく読むことによつて、常識的にのみものを知つてゐることの非をわきまへられることは、こよなき益と申すべきであらう。この一冊には、歎異抄の文学性の問題も出て来るし、親鸞の伝記に関する新資料やそれらを通じて中世の国語音韻の特色さへも学べる論がある。日本文学史や国文学概論の研究にきはめてたいせつで、しかも現在の、この学界の最新最高の説が随所に説かれてゐる点もありがたいものといふべきであらう。

つきに、第二集の目次をみる。

日蓮救母変文の源流	小川 貫式	七
紫式部日記に描かれたる仏教	永井 義憲	四七
——「十一日の暁」の段の仏事——	新間 進一	六三
「今様」に見る仏教	峯村 文人	八七
新古今歌風と中世仏教	榎 泰純	一三三
妙音院師長の音楽と日本音楽史上の位置	権藤 円立	一九七
平曲の成立についての一考察	門前 貞一	二一五
平家物語序章の解釈	山本 唯一	二四七
——無常と因果との関連——		
芭蕉文学の宗教性		

『妙好人伝』とその作者たち

佐々木倫生 二八三

漸入仏道集 —— 翻印及び解説 ——

高橋 貞一 三一九

筆者紹介

三六八

以上のやうである。こんどの集は、お顔をあはせ、ことばを交した執筆者が七名もあり、眼前にその人の姿が髣髴とし、その声が聞えて来るやうでうれしい。「榊」さんのごとき、神様に關する植物の姓がお坊さんであったり、「倫生」を「みちお」と呼ぶことなど、何回も話しあつた間がらだこそいへることである。それにしても、現在京都女子大学助教授である佐々木倫生氏とかつて数年間職場を共にしてゐたことがあつたが、氏がこのやうな方面學問をしていらつしやるとは、まったく知らなかつた。とすると、毎日顔をあはせてゐても、その人の學問なり芸術なりは、なかなか理解しがたいものであることがわかる。

「仏教文學研究」も第二集になると、東洋音樂に關する論文が三点もあり、ことに『妙音院師長の音樂と日本音樂史上の位置』は、六四ページにおよぶ力のもつた論である。

論文集には、一人の著者の論著の有する体系をもつのに弱いといふ欠点がある反面、一人の學者では到底考へられない、広く且つ深い學問を一挙に學び得る特色がある。しかも雜誌よりもまとまつた深さと大きな量とがある。製本・印刷・用紙などすべて申し分がなく、おち着いた色の函にまで入つてゐるこの二冊の論文集を前にして、その(三)(四)(五)……が陸續と出るのを刮目して待ちたい。そして相愛學園に縁が出来なかつたら、おそらくこの本の書評——といふべきでなく、單なる思ひつきであるが——などする機会がなかつたであらうと思ふと、そのありがたさを思ひ、それをさう強く感ずるやうになつた年齢をも思ふのである。そして、さらに、このすぐれた書が仏教を信ずる人人、日本の文學を愛する人人の机邊を飾り、書架に収められることを思ふのである。

『仏教文學研究』(一) 昭和三八年一月三〇日刊 定価七〇〇円。「仏教文學研究」(二) 昭和三九年二月二〇日刊 定価九五〇円。ともに發行所は、京都市下京区正面烏丸東 法藏館である。